
SNATCH - スナッチ -

anknow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S N A T C H - スナッチ I

【Nコード】

N 6 7 3 2 0

【作者名】

a n k n o w

【あらすじ】

「いまから、あなたは99人の暗殺者から狙われます。」

突然、俺がアサS I Nという暗殺者から命を狙われることになってしまった

いったいなぜ？何で俺？

しかも、俺をまもってくれるのが、一人の美少女スナイパーだった
どうなるの、俺！

巻き込まれ型暗殺小説

巻目 美少女と銃声

『おめでとうございます。貴君は、見事アサシンゲームのターゲットに決まりました。貴君は、100人のアサシンに命を狙われます。それでは、存分に命を狙われてください。』
先に言つとくと、この5秒後に俺は死にかけるのだ

まずは、自己紹介からはじめよう。
俺の名前は黒彦時斗^{くろひこときと}という。

大それた名前だが、実際の俺はスリ師っていう最低な男だ
自分でいうのもなんだが、俺は結構天才詐欺スリ師で有名だったのだ。

まあ、『元天才スリ師』なのだが。
そんなわけで、今はただのプーだ

自己紹介が終わったところで、そろそろ本題だ。
冒頭の手紙を自分の郵便受けから、出したところからはじめようか

pm 12:00

なんだ、これ？

「新手の嫌がらせか。」

普通は、嫌がらせと思いつくだろう。

しかし、見れば見るほど、奇怪な内容なのだ。

何が、『存分に、命を狙われてください』、だ
ふざけてんのか

その手紙をゴミ箱に、投げ入れた瞬間、
ズドン！！

鈍い音とと火薬のにおいともに、壁に穴が空き、手紙が消えたのだ。
「?????!?!?!」

その瞬間、

窓から、銃弾が降ってきた

「うわ!!!」

俺はとつさに身をかがみ、ソファの方へ走り出し、裏に隠れた
見なくても、わかる。

俺の2LDKがボロボロになっていくのが。

銃弾の嵐が止んだ。

終わったのか？

ソファの裏から、出た瞬間、

パン!!!

軽い音が鳴り、俺の前に銃弾が現れた。

俺の思考がそこで終わった。

まだ自己紹介しかやっていないのに。

起きたら、そこはベッドの上だった。

天国か？

「天国なんかじゃない。」

「!!!」

「ここでお前が死んだら、私が助けた意味が無い。」

そこには、銀色の髪をした、少女が立っていた。

「ど、どちら様ですか？」

そこで、俺は辺りをゆっくり見回した。

確かに俺の部屋なのだが、すでに見る形も無い。粉々になった家具、
綿が飛び出たこのベッドに、枕。

そして壁のそこら中にある壁に残った痛久しい弾痕の数々。

夢じゃなかったのか

夢だったらどれだけよかったか

試しに頬を引っ張ってみたが、ふつうに痛い

「私はナイトのスナイパーだ。」

剣なのか銃なのか、どっちかにしてくれ

「お前が『ターゲット』で合ってるんだな。」

抑揚の無い声で言った

「今から、ルール説明を行うから、ちゃんと聞け。」

そして、アサSINゲームのルール説明を突然、現れた美少女がつらつらと、まるで台本があるのではないかとい感じでありえないことを言い放った。

「まず、お前は100人の暗殺者に狙われる。正確には、私を抜いて99人の暗殺者が頭を狙う。」

私はお前を守るためのポーンとして選ばれた。」

俺は、間髪いれず、質問した

「ちょ、ちよつと待てよ。俺が100人の暗殺者に狙われる？何で？誰が？何のために？いつまで？」

俺は、いい疲れててもとにあった水を飲んだ。

「だから、99人だ。目的や主催者などは、明かされていない。」

「お前は、いつまで、と聞いただろう。その期限は一生とされている。」

「ハア？じゃあ、さっきのような銃乱射を震えて見てろっていうのかよ！」

「そのための特別ルールがある。刺客の暗殺者をこのゲームに『参加不続行』と認めさせれば、暗殺者の数は減る。」

「あんな普通に銃撃ってくる奴をどうすればいいんだよ！」

「そのために、私が要るではないか。まずは、ひとりやってみるか。」

不敵に笑った。

人の人生には、転機があるという。

俺の人生は、ここから変わったといってもいいだろう

巻話目 美少女と銃声（後書き）

初投稿です。ふつつか者ですが、よろしくおねがいします

親友と弾丸（前書き）

ついに、弐話です

彼女の声のトーンが分からない人は、「ガロダム 00」のせいな・

F・セイエイを

御想像ください

ではっ！

親友と弾丸

狂ってる。 政治も人も世界さえも
善すら悪に変わる世界は生きる。 いや、生きなきゃならない
いつか、悪が善に変わる世界を信じて

前回のあらすじ

普通の『元』天才スリ 黒彦時斗（俺）は変な手紙が来た瞬間に何
故か死にかけ、変な少女に助けられちゃった。

Q：なんで俺が殺されなければならぬでしょう。

A：俺が聞きたいわ

am1:00

俺を殺そうとした暗殺者を探すことにした。

明日から、探そう。

そうしよう

今日はあまりにも、いろんなことが、起きすぎた。

俺の頭はパンク寸前だ

それに、頭のなかでは、もう眠ってる。

布団を彼女のと、一緒に敷きひとつの疑問が頭をよぎった。

「おい、おまえの名前知らないんだけど」

彼女は物騒にも、銃を磨いている。

「名前・・・名前など無い」

抑揚の無い声で言った

「それじゃ、なんて呼べばいいん・・・」

チャイムが鳴った。

「ん？」

彼女はちゃつと銃を構えた。

おいおい、そんな物騒なもん簡単にだすなよ、と言いたところ

だが、俺は一回死にかけたから、なんにも言わなかった。学習してんのよ、俺は。

それに、時間がおかしい。

こんなゲームに参加しなくても、普通に怪しい。

俺は恐れながら、ドアをひいた。

「こんにちは。ひさしぶりだね」

俺は警戒を解いた。

「おう、こんな遅くにどうしたんだ」

彼女はわけが分からないという顔で、銃を構えていた。

「大丈夫。紹介するよ。こいつは、俺の親友だ」

「かみさわりさい神澤理祭といいます。以後、お見知りおきを」

妙に丁寧なこの男は、俺の親友だ。

俺に合ってない友達だろ。

彼女は、銃を置き、警戒を解いたがに見えた。

「血の匂いをする」

ボソツとそんな言葉を言った瞬間、電光石火のように彼に近づき、回し蹴りを繰り出し彼は窓を割り外に吹っ飛んだ。

「な!？」

俺は、啞然としてが、ハツと我に返った瞬間、彼女の胸倉を掴んだ。
「な、なにやってんだよ!おまえ、自分のやったことわかってんのか!」

「殺られる前にやらなければ、こっちが殺られていた。」

少し、間をおき、

「それに奴はまだ、生きている。」

「え?」

「いやー痛いですよ。急に蹴ってくんですもん」

「な!？」

本日二回目

ピンピンしていた。

それも、すこしだけの埃をかぶり。

「なんで、いきてるんだ。」

「え、ひどいな。生きてちゃ悪い？」

「普通、あんなどこまでふつとんだら、死ぬだらう！」

「ふふつ、ははははは」

急に笑い出した。

ボーッと聞いている俺の後ろから、声が聞こえてきた。

「まだ、分らないのか。奴は、ゲームの参加者つまり、お前を殺しに来た暗殺者だ」

「え??？」

怒涛の急展開

親友と弾丸（後書き）

まさかの急展開です。

彼女の名前は、次に明かされます。
では、よろしくー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6732o/>

SNATCH - スナッチ -

2010年11月8日20時50分発行